

「チームでつくる児童理解シート」の提案

－特別な支援を要する児童の理解と指導計画立案のために－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 河西七帆

1. 研究目的とその背景

(1) 特別支援教育を受ける児童生徒の増加

近年、特別な配慮を必要とする児童数は増加の傾向にある。内閣府の『令和7年版 障害者白書』によれば、2014年から2024年の10年間で、特別支援教育を受ける児童生徒数は34.0万人から68.0万人へと増加している。わずか10年間で2倍も増加したことにより、現場ではその対応に試行錯誤を重ねているのが実情である。

井口・吉井(2019)は、小学校教員が特別な支援を要する子どもと関わる中で抱える困惑についてインタビュー調査を行った。インタビューを受けた多くの教員は、「担任が一人で抱え込み、周囲の教師に理解してもらうことが難しい」と語った。しかし、研修の機会や、身近に理解してくれる管理職・同僚との出会いを通じて、少しずつ自信を持ち、周囲への情報伝達やサポートに積極的になる姿が確認された。このことから、教員が困難を一人で抱え込むのではなく、チームとして課題解決に取り組むことの重要性が示されている。

(2) チームで課題解決することの重要性

文部科学省(2022)は、「教職員がチームで質の高い教育活動を提供していく必要がある」としている。さらに、『生徒指導提要』においても、「教職員と多職種の専門家や地域の人々が連携・協働して教育活動を展開することが求められる」としている。これらのことから、教育現場においては、チームによる課題解決が重視されていることが分かる。

続いて、小学校と特別支援学校とのチームの在り方について述べる。両校の連携には、特別支援学校のセンター的機能の活用が挙げられる。その機能の一つとして、特別支援学校の教員が通常の学級に在籍する児童生徒を対象に、「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」の作成に協力する支援がある。本研究では、この協力支援

に焦点を当てることにした。

(3) 「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」の課題

① 「個別の教育支援計画」の課題

文部科学省(2023)は、「個別の教育支援計画」の作成において、情報収集や分析等に多くの時間を要し、教員の負担が大きいことを課題として挙げている。また、計画が実際の支援に十分に活用されていない点や、情報共有の不足により連携会議が形式的になりやすい点も指摘している。

② 「個別の指導計画」の課題

河西(2025)は、児童生徒の実態把握における困難さが、指導・支援の具体的な目標設定を阻害している現状を明らかにしている。また、計画書自体は作成されているものの、その効果的な活用方法の不明確さや、作成過程における教員の自己効力感の低さについても指摘している。さらに、作成方法に困難が生じた際、気軽に相談できる対象や校内の支援体制が十分に整備されていないという課題も浮き彫りにした。以上のことを踏まえると、チームによる情報共有および協働体制の不十分さが「個別の指導計画」および「個別の教育支援計画」における共通の課題とすることができる。その結果、計画の作成という事務的な作業に終始しており、実際の支援内容や指導改善へと還元されていない実態が生じていると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、小学校教員が、日々の指導で抱えている課題を解決するための話し合いを通して児童理解や指導方針を検討するためのツールの提案を行う。ツールは「チームでつくる児童理解シート」(以下、「理解シート」とする)とし、作成・検討するものとする。これはまた、「個別の教育支援計画」及び「個別の指導計画」の作成の一助となるものであり、日々の指導に直接的に役立つことを目指すものである。

なお、本研究における「チーム」とは、管理職、当該児童を直接指導する教職員、特別支援教育支援員、および養護教諭等で構成される校内体制を指す。また、専門的知見を補完し、組織的な支援を推進する存在として、特別支援学校の特別支援教育コーディネーターをその枠組みに含むものとする。

2. 研究方法

「理解シート」を作成するにあたって、次の手順で行うものとする。

(1) 課題に基づく第1案の作成

特別な支援を要する児童への指導に関する課題を踏まえ、第1案としての「理解シート」を提案する。

(2) 第1案の評価：半構造化インタビュー

本研究で考案した第1案の「理解シート」の妥当性を検討し、現場での実用性を高めるための改善指針を得ることを目的として、調査を実施する。具体的には、山梨県内の公立小学校および特別支援学校の特別支援教育コーディネーター複数名を対象とし、半構造化インタビュー調査を実施する。

(3) インタビュー結果の整理と第2案の作成

インタビュー調査によって得られたデータは、KJ法を用いて分析を行う。具体的には、対象者の発言から抽出した情報を類似性に基づいてカテゴリー化と図解化を行うことで、第1案の課題や現場での実用性における改善点を体系的に把握する。この分析結果に基づき、「理解シート」の項目構成や記述様式等を再編・修正し、第2案を作成する。

(4) 第2案の評価：実践的活用

作成した第2案を検証し、実効性をさらに高めるため、研究協力校である公立小学校の協力を得て、試行的実践を行う。具体的には、実際の支援場面において「理解シート」を導入・活用するとともに、小学校教員と特別支援学校の特別支援教育コーディネーターが、同一のシートを使いながら協議を行う。この過程を通して、「理解シート」がチームによる合意形成や指導に及ぼす効果を評価する。

図1 「チームでつくる児童理解シート」第1案

3. 「チームでつくる児童理解シート」の提案(第1案)

「理解シート」の考案にあたっては、石隈・田村(2013)による「個別の指導計画」の枠組みを参照した。さらに、児童の実態を記入する項目については、いるかどり・武井・滝澤(2024)『特別支援教育「自立活動」の授業づくり』に示された内容を参照し、引用した。また、作成にあたってはマイクロソフト社のExcelを採用している。その意図は、多くの学校現場で普及している汎用性の高いソフトウェアであり、一定期間にわたる児童の変容を継続的に記録し、Excelのシートを適宜追加することで情報を蓄積していく運用を想定したためである。

作成にあたっては、先行研究等から導き出された課題を整理し、これらを克服するための視点として以下の3点を設定し、作成した(図1)。

- ① 深い児童理解の実現
- ② チーム連携
- ③ 「個別の教育支援計画」、「個別の指導計画」の扱いにくさの解消

以下にそれぞれの詳細を記述する。

① 深い児童理解の実現

近年、特別な支援を要する児童生徒数は増加傾向にあり、表面的な対応に留まらず、一人ひとりの特性や背景を精緻に把握し、適切な支援へとつなげる実践が教育現場において不可欠となっている。しかし、児童の多岐にわたる行動をどのように整理し、指導や支援の計画へと結びつけるかは、依然として個々の教員の経験や主観に委ねられている側面が強い。井口・吉井(2019)は、特別な支援を要する児童の行動をめぐる、教師がその心理的背景や文脈を把握できずに「困惑」する場面が多く存在することを明らかにしている。また、吉井(2022)は、子どもの弱さだけを見るのではなく、強みを理解し、それを支援に生かすことの重要性を示している。さらに、長所を生かすことで、学習や行動面の困難を支えることができると指摘している。そこで本研究では、「深い児童理解」の実現を目指し、1) 児童の実態を多面的に捉え、心理的背景や行動の文脈を踏まえた理解を図ること、2) 困難さだけでなく児童の「強み」を明示し、肯定的な視点から児童理解を深めること、の2点を重視した。これにより、児童の可能性を肯定的に捉え直し、より実効性の高い指導計画の立案に寄与することを目指す。

② チーム連携

支援を担う教員が個人で抱え込むのではなく、チームとして協力し試行錯誤を重ねながら支援に取り組む体制の構築が重要である。チームによる共通理解は、支援の質の向上だけでなく、教員の心理的負担の軽減にもつながると考えられる。「理解シート」は、単なる記録用紙ではなく、チーム連携を円滑にするための「対話の媒体」として設計した。具体的には、「理解シート」は、チーム内での役割分担と合意形成のプロセスを視覚的に明確化するため、Excelのセルを色分けして構成している。色付きのセルは、協議を円滑に進めるための事前準備として、直接指導する教職員(管理職、担任、小学校と特別支援学校のコーディネーター、特別支援教育支援員、養護教諭等)が児童の基本情報や具体的なエピソード

をあらかじめ記入する。色なしのセルは、ケース会議等の話し合いの場で、事前に入力された情報を多角的に分析し、背景要因の推察や今後の具体的な支援方針を共同で作成・集約する。こうしたプロセスを経ることで、複数の視点を持ち寄りながら支援の方向性を検討することを目指した。

③ 「個別の教育支援計画」と「個別の指導計画」の扱いにくさの解消

前述したように、「個別の教育支援計画」および「個別の指導計画」の作成・活用を巡っては、依然として多くの課題が残されている。河西(2025)は、実態把握の困難さが具体的な目標設定を阻害している現状を明らかにした。こうしたことを踏まえると、教員が直面する「記述の困難さ」の本質は、情報の分類基準が不明確であり、収集した膨大な情報を適切に峻別・構造化できない点にあると考えられる。

これに対し、井上(2010)は、ICF(国際生活機能分類)の視点を用いることで、子どもの状態像の背景要因を体系的に整理できると指摘し、「情報の構造化が記述の混乱を防ぎ、指導目標への連動性を高める」と論じている。この知見に基づき、実態把握の記述における判断の迷いを軽減する必要があると考えた。そこで、「理解シート」の実態把握の枠組みとして、特別支援教育の根幹をなす「自立活動の内容6区分」を採用した。公的な指標に準拠して児童の行動を構造的に捉えることで、困難さの背景要因を多角的に分析することが可能となる。

さらに、本研究では、作成負担の軽減および情報の整合性維持を目的とし、実態把握に関する項目を両計画と共通化させた。「理解シート」に記録・蓄積された協議内容は、そのまま両計画を作成するための基礎資料となるようにする。計画作成の前段階において、本シートを介した対話のプロセスを導入することは、書類作成自体が目的化することを抑制する一助となると考えた。また、協議を通じ抽出・焦点化された「中心的な課題」を指導の柱として両計画に反映させることで、日々の教育活動と密接に連動する、実効性の高い生きた指導計画の構築に寄与するこ

とを目指す。

4. 「チームでつくる児童理解シート」の検証

第1案の「理解シート」を評価するために、次の通り半構造化インタビューを実施・分析する。

(1) インタビュー調査の概要

(2) 書き起こし

(3) 分類（複数名で分類した結果）

(4) 関連付け

以下(1)～(4)の詳細を記述する。

(1) インタビュー調査の概要

① 調査目的

「理解シート」について、実際の活用に向けて評価し、課題点を明らかにする。

② 対象

山梨県内の小学校と特別支援学校の特別支援教育コーディネーター複数名を対象とする。

③ 質問内容

質問内容は次の通りである。

- ・「理解シート」に関すること
- ・指導記録や情報共有に関すること
- ・現状把握に関すること

なお、倫理的配慮において、研究協力者に調査の目的・録音の承諾について口答と書面による説明を行い、個人が特定されないよう配慮することを伝えて承諾を得る。

(2) 書き起こし

半構造化インタビューの実施後、録音データに基づき対象者の発言内容を忠実に記録した逐語録を作成する。その後、基礎資料として、Excelを用いて発言内容を「属性（職種等）」ごとに整理する。この過程を経て、次段階におけるKJ法を用いた分析の準備を整えることとする。

(3) 分類（複数名で分類した結果）

作成した逐語録を精読し、発言内容の類似性に基づきカテゴリー化を行う。その後、共通する概念ごとにこれらを整理・集約し、分析の柱となる項目を抽出する。

(4) 関連付け

5つの項目をKJ法の手法を用いて図解化する。これにより、カテゴリー化した各項目間の相互関係を可視化する。

5. インタビュー結果の整理と第2案の作成

以上の分析結果から得られた主な項目として、【専門性】【合理的配慮】【チーム】【使い方】【負担軽減】の5項目を抽出した（図2）。以下に各カテゴリーの詳細を述べる。

(1) 専門性の相互尊重と協働【専門性】

支援の方向性を決定する際、互いの専門性を尊重し、協議を重ねることが不可欠である。特別支援教育の知見を一部の教員のみにも留めるのではなく、学校全体で共通理解することで、現場の実態に即した支援体制の構築が可能となることが示唆された。

(2) 合理的配慮の明文化と連続性の確保【合理的配慮】

対象児童一人ひとりの実態に基づき、「合理的配慮」の内容を具体的に明文化する枠組みを設ける重要性が本調査から浮き彫りとなった。個別のニーズに応じた配慮事項を明確に記録し、教職員間で共有する仕組みを整えることは、年度更新や進学時における支援の連続性を担保する上で有効な要素である。

(3) 包括的支援体制の構築【チーム】

担任が孤立し、一人で課題を抱え込む現状は、心理的・実務的な負担を増大させる主因となっている。これを解消するためには、校内組織のみならず、特別支援学校の特別支援教育コーディネーター等も含めた包括的なチームを構築し、役割の分担と情報の共有を推進することが求められる。

(4) 実効性を高める運用の工夫【使い方】

「理解シート」を個人の記録から組織的な取り組みへと昇華させるためには、具体的な使い方の周知が鍵となる。記述例の充実や、シート導入の目的・意義を明確化することが、支援の質の平準化につながる。また、第1案において曖昧であった対象児童を「小学校の通常の学級または特別支援学級に在籍し、特別な支援を要する児童」と再定義することで、活用場面における混乱の抑制を図る必要性が明確となった。

(5) 持続可能な運用のための負担軽減【負担軽減】

支援体制を持続可能なものとするためには、教員の負担軽減への配慮が不可欠である。そも

そも「理解シート」は、書類作成を省力化することを前提に作成されている。この前提が実現すれば、児童と向き合う指導に注力できる環境の醸成に寄与すると考える。

以上の5つの項目の相関関係を整理した(図3)。続けてその関係について述べる。

調査の結果、支援内容の検討においては、管理職を含むチームによる合意形成が極めて重要であることが明らかとなった。その際、特別支援学校の特別支援教育コーディネーターがチームに参画することで、組織全体の専門性が向上し、知見を個人の経験に留めない学校全体の共通理解へと昇華できることが示唆された。すなわち、

【専門性】と【チーム】は、互いの質を高め合う相互補完的な関係にあるといえる。次に、これらの取組がどのように「合理的配慮」へと結びつくのかについて述べる。合理的配慮は、児童本人および保護者との合意形成を前提とし、継続的な対話を通して具体化されるものである。そのため、教員集団の専門性や教室・学校の環境といった教育現場の実態を丁寧に把握し、多角的に検討することが求められる。

先に示した【専門性】と【チーム】が適切に機能することで、初めて実態に即した合理的配慮を導き出すことが可能となる。このようなプロ

セスを経ることで、児童の抱える困難さに寄り添い、個々の教育的ニーズに応じた合理的配慮や環境調整を検討・設定することができる。

さらに、第1案における課題として、活用手順の不明確さが明らかとなった。これを踏まえ、第2案ではツールの活用意義や手順を詳細に規定した。適切な【使い方】を周知し、支援の質を平準化することは、教員の心理的・事務的な【負担軽減】に直結し、ひいては持続可能な運用体制の構築へと繋がると考える。

以上の分析を踏まえ、改善に向けた視点を2点導き出した。これらの視点に基づき、「理解シート」の改善を行った。

6. 「チームでつくる児童理解シート」の改善

(1) 使い方を分かりやすくするための使い方や活用法の作成

「理解シート」の運用を検討するにあたり、まず小学校と特別支援学校における教育課程の構造的な相違を整理する必要がある。特別支援学校においては、児童一人ひとりの障害の程度や特性に基づき、弾力的な個別の教育課程が編成される。これに対し、小学校の通常学級では、学習指導要領に準拠した学年ごとの教育課程を集団として履修させることが原則であり、学習内容の柔軟な変更には制度的な制約が伴う。通常学級には多様な支援ニーズを有する児童が在籍している。これらの児童に対しては、「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」に基づく配慮が行われるが、通常学級では学年別の教育課程の履修が原則であるため、支援は当該学年の教育内容の範囲内での調整に留まることが多い。個別のニーズと集団としての教育課程の編成との間に生まれる軋轢は、特別支援学校と比較した際に明らかとなる通常の学級における指導上の特徴であり、相違点でもある。このような制度的枠組みにおいて、学級担任は学級集団の維持と個別のニーズへの対応という二律背反する課題を抱えながら、日々の指導にあたっている。そのため、特別支援学校の特別支援教育コーディネーターからの助言が、通常の学級における多忙感や制度的制約を十分に考慮していない、あ

項目	説明
専門性	互いの専門性を尊重し合い、協議を重ねることで、現場に即した支援の方向性を見いだすことができる。協働的に取り組むことで、特別支援の専門性を活かしながら、学校全体で子どもを支える体制を整えることができる。
合理的配慮	合理的配慮を置く必要がある。
チーム	学級担任は子どもの問題や学級運営を一人で抱え込みやすく、その負担は非常に大きくなりがちである。だからこそ、校内外の多様な支援体制を組み合わせていく必要がある。
使い方	例示の充実とシート活用説明は、支援を「個人の努力」に留めず「組織的な取り組み」へと発展させるための重要な鍵となる。
負担軽減	作成に過度な負担がかからず、通常学級でも活用できるものであることが求められる。「個別の指導計画」や「個別の教育支援計画」の作成の一助となるものとし、効率性と汎用性を兼ね備えた仕組みを整えることが、持続可能な支援につながる。

その他:感想やシートに直接かわからない、指導に関する意見等

図2 カテゴリー化

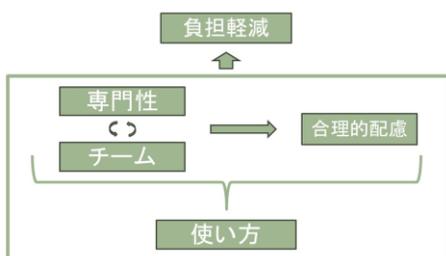


図3 図解化

るいは実態と乖離している場合、その実践可能性は著しく低下し、支援の効果も限定的になることが懸念される。

ここでは、この課題を解決するために、小学校の実情を踏まえ、単なる手順の周知に留まらず、具体的な「シートの活用法」や「シートの書き方」を明示した活用指針を追加して作成する。関係者間における解釈の相違を最小化し、円滑な合意形成を促進する視点で改善することとした。これをまとめExcelのシートに追加する(図4)。

(2) 児童理解の一助となる資料の作成

2つ目の視点として、小学校教員が専門家から常に直接的な助言を受けられる体制が理想的である一方、現実的にはその機会を十分に確保することが難しいことがあげられる。そこで、小学校教員がこれまでに培ってきた経験や実践を活かしながら、特別支援教育の専門的な視点を補助的に加え、日常の指導の中に取り入れるための「児童理解の一助となる資料」を加える(図5)。その目的は、児童の状況を言語化する手がかりを例示することである。自立活動の内容6区分ごとにキーワードを整理し、実態把握が難しいとされる発達障害のある児童が抱える困難さを「気になるところ」として例示した。さらに、それぞれの「気になるところ」に対応する支援内容を明記した。具体的には、「本人が内面に抱えている困り感」という新たな視点を導入する。これにより、外見上の行動のみに焦点を当てるのではなく、本人の主観的な世界や感覚的な特性を理解する視点を加えることで、児童理解および支援の質を一層深めることを目指す。

なお、本資料はあくまで一例であり、具体的な支援のあり方を一律に示すものではない。実際の支援にあたっては、児童一人ひとりの実態や背景を丁寧に把握し、それぞれに応じた支援を検討・実践していくことを重視している。

(3) 第2案の作成

前述した2つの資料(図4, 図5)をExcelのシートに追加し、そのうえで、1案の「理解シート」の構成を再検討した。具体的には、記述の重複や項目の不備を徹修正し第2案へと更新した(図6)。

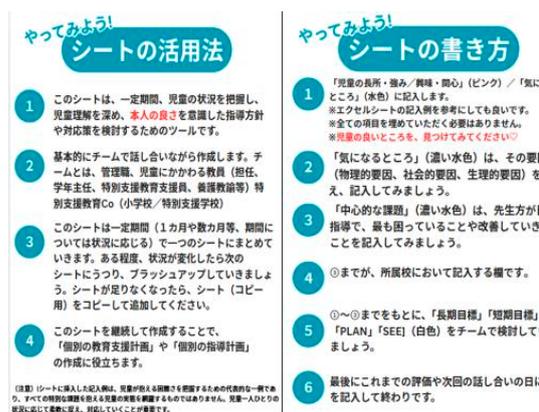


図4 シートの活用法と書き方



図5 児童理解の一助となる資料

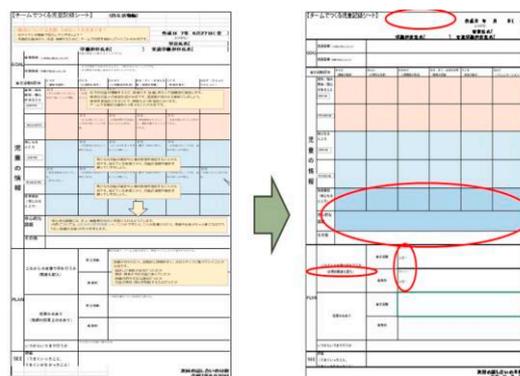


図6 「チームでつくる児童理解シート」第2案

7. 第2案の評価：実践的活用

第2案を山梨県内の公立小学校に提案し、「理解シート」を活用し、評価していただいた。なお、児童の個人情報保護のため、具体的な話し合いや実践の内容については、記載できないことをお断りする。

(1) 校内研修の実施（夏季休業期間）

夏季休業期間を活用し、協力いただく公立の小学校の全教職員を対象とした校内研修の講師を務めた。研修では、開発した「理解シート」の意図や具体的な活用方法を解説するとともに、本研究の核となる自立活動の視点について講話および演習を行った。特に、児童の見えにくい困り感を自立活動の内容6区分に関連付けて捉え、それを指導目標へと具現化するプロセスを重点的に解説した。このように、全教職員が共通の専門的視座を持つための基盤を提示した。続くグループワークでは、講話の内容を踏まえ、児童理解の深化を図るとともに、「理解シート」の有用性の検証を行った。

(2) 第2案の運用（2学期初頭）

2学期以降、「理解シート」の第2案を導入し、対象児童の実態把握を行った。まず、担任教員への聞き取りを通して、協力校の特別支援教育コーディネーターが第2案の入力を実施した。

(3) 訪問支援とケース会議の実施

入力されたシートの内容を詳細に確認し、筆者（特別支援学校の特別支援教育コーディネーター）による訪問支援を実施した。対象児童の直接観察の結果を、協力校の特別支援教育コーディネーターと共に「理解シート」へ追記・集約した後、ケース会議を開催した。会議には管理職、担任、協力校の特別支援教育コーディネーターに加え、筆者が加わり、「理解シート」を活用することで、様々な立場から、多角的に情報共有を行った。

(4) 児童情報の更新

協力校の教員が日々実践している支援を基盤としつつ、児童の抱える困難さへの対応と併せて、児童が本来持っている得意な側面や強みについても積極的に話題に上げた。その結果、児童に関する情報を多面的に更新することができ、今後のより効果的な指導の在り方について検討を深めることが可能となった。

(5) 実効性のある指導方針の立案と体制の最適化

更新された情報を基盤として、支援の優先順位を明確にした指導方針をチームで立案した。

これに伴い、特別支援教育支援員の効果的な配置や役割分担についても再検討を深めることができた。また、担任一人に負担を集中させないチームで担任を支える指導體制の構築へとつながり、さらに、無理なく現場で実施可能な児童へのより適切な支援の検討にも結び付けることができた。

8. 研究成果と課題、今後の展望

本研究は、小学校教員が、日々の指導で抱えている課題を解決するための、話し合いを通して児童理解や指導方針を検討するためのツール「チームでつくる児童理解シート」の提案を行うことを目的とした。また、話し合いを通じて日々の指導への直接的な寄与、および「個別の教育支援計画」・「個別の指導計画」の作成に資することを目指した。これを実現するために、①深い児童理解の実現、②チーム連携、③「個別の教育支援計画」および「個別の指導計画」における扱いにくさの解消という3つの視点を設定し、それぞれの研究成果と課題について検討した。①の視点については、「理解シート」を媒介とした協議が、教員間の多角的な児童理解を深化・変容させることが分かった。具体的なエピソードを交えて言語化するプロセスは、単なる課題の列挙に留まらない、児童の潜在的な強みや内的世界への洞察を促すことができると考える。このまなざしの変容こそが、児童を「配慮を要する対象」としてではなく、個々の願いを有する一人の主体として捉え直す契機となり、児童情報の更新を可能にすると考ええる。②の視点については、認識を共有したチームが、実効性の高い指導の立案を可能にすることが示唆された。担任だけでなく、管理職、特別支援教育コーディネーター、特別支援学校の特別支援教育コーディネーター等が「理解シート」を用いて情報とその解釈を共有しながら対話を重ねることで、具体的な支援方針が、優先順位を明確にしながら導き出される可能性が示された。

一方、③については課題が残された。「個別の教育支援計画」および「個別の指導計画」の作成には多大な時間を要する。また、作成自体が目的

化し、日々の指導に活かされにくい。本研究ではこのことの解消を目指していた。しかし、両計画の扱いにくさの解消については検証することがかなわず、未評価という結果となった。

以上の3つの視点とは別に、本研究では次の課題が明らかになった。第1案の修正過程では、シートそのものよりも「使い方」や補助資料が重視される傾向が見られた。シートの形式のみならず、運用方法に焦点を当てる必要がある。第2案の活用の際には、協力校と筆者が話し合いを重ね、運用可能な形に調整したが、今後さらに展開する場合には、丁寧な運用方法の説明と、継続的な支援の実施が大切である。特に、シートの使い方を明確に示し、関係者間で共有することが重要である。

最後に、今後の展望について述べる。今後は、「理解シート」を作成・実施・評価・改善のサイクルに位置づけ、児童の実態に即した指導方針を協働的に創出する実践的ツールとして継続的に機能させていく。そのために、教育現場の状況を丁寧に把握しながら、実践と検証を積み重ね、引き続き、改善と発展に取り組んでいく。

なお、本シートに関心のある方は、QRコードよりエクセルシートをダウンロードされたい。リンク先には注意事項およびアンケートも掲載しているため、併せて確認されたい。基本的には自由に活用、アレンジするなどしていただきたい。運用等の工夫もしていただき、その過程や結果をアンケートに回答していただければ幸いです。



謝辞

本研究の実習及び研究の遂行に際し、本学の障害児教育講座の吉井勘人教授には、貴重なご助言を賜りました。また、インタビューにご協力いただいた先生方ならびに協力校の皆さまに心より感謝申し上げます。

引用文献

- ・井上秀和（2010）「ICFの視点を取り入れた個別の指導計画の作成と活用に関する一考察—実態把握の整理と指導目標・指導内容の設定との関連を中心に—」『国立特別支援教育総合研究所内の研究紀要』国立特別支援教育総合研究所
- ・井口素笑, 吉井 勘人（2019）「小学校教師における支援を要する子どもに直面した際の困惑とその後の『子どもの見方』の変化」『教育実践学研究』24号, 山梨大学, pp.273-291
- ・いるかどり, 武井恒, 滝澤健（2024）『特別支援教育「自立活動」の授業づくり』ソシム株式会社
- ・田村節子・石隈利紀（2013）『石隈・田村式援助シートによる実践チーム援助—特別支援教育編』図書文化社
- ・長崎勤, 吉井勘人, 長澤真史（2022）『これからの特別支援教育—発達支援とインクルーシブ社会実現のために—』北樹出版
- ・河西七帆（2025）「公立小学校における教師のつながりを生み出す校内委員会の在り方に関する検討—チームでつくり、チームが育つ個別の指導計画に着目して—」『教育実践研究報告書』山梨大学
- ・内閣府（2025）「令和7年版 障害者白書」<https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/r07hakuusho/zenbun/pdf/s3-1.pdf>（2026/2/1 閲覧）
- ・文部科学省（2022）『生徒指導提要』東洋館出版社
- ・文部科学省（2023）「特別支援教育の充実について」
<https://www.mhlw.go.jp/content/001076370.pdf>（2026/2/1 閲覧）
- ・文部科学省（2022）『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について—「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成—』中央教育審議会答申
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00004.htm（2026/2/1 閲覧）